

チェッコリ絵における現代性と、その解釈に基づいたデザインに関する造形的研究

林, 東煥

<https://hdl.handle.net/2324/7182473>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 林東煥

論 文 名 : チェッコリ絵における現代性と、その解釈に基づいたデザインに関する造形的研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

韓国のデザインコミュニティは、1986年のソウル・アジアゲーム、1988年のソウルオリンピックをきっかけに、対外的な韓国的イメージの必要性が主に国や産業界の主導で求められ、インターネットや交通の発達を背景にグローバル化した現代の韓国において、韓国的なものに関する問題に改めて直面している。

本研究は、こうした時代背景を踏まえ、現代における韓国的なものとして伝統文化コンテンツであるチェッコリ絵に注目した。チェッコリ絵は朝鮮時代後期 19 世紀に流行した宮廷絵画から民画の領域に含まれる彩色画であり、その題材と造形性について社会文化的アプローチを通じて明らかにし、モチーフである本における歴史性を考察する。加えて、そこから抽出したチェッコリ絵の造形要素を活用し、現代のデザイン領域で継承する方向性をグラフィック作品の制作を通して探ることを目的とする。論文は以下の 6 章からなる。

第 1 章では「韓国的なるもの」をめぐる韓国の現代デザイン史を考察した。1960 年代以降の韓国のデザインの動向について国家、企業、教育の観点からアプローチし、韓国のデザインが発展する中で問題点を抽出した。また、その中で特に韓国のデザイン性を深く研究したデザイナーの活動と思想に着目し、韓国の伝統文化コンテンツを具体的に現代のデザインに昇華させる上での導き手となるデザイン哲学を導き出した。こうした歴史の中で伝統文化コンテンツを用いたデザインが大衆文化の領域に至ることができなかった要因を分析した。

第 2 章では 2012 年から 2022 年までのチェッコリ絵における先行研究をデザイン分野、美術分野、文化財分野に分類し、調査した。その結果、現代性の観点からの独自の解釈より表現手法を中心とした作品制作研究がほとんどであり、題材に対する歴史的解釈に課題があることがわかった。

第 3 章では、朝鮮絵画の種類を身分によって分類し、チェッコリ絵が流行した朝鮮後期の時代的背景を考察した。外部的には宗教と修交要求等の混乱した状況の中で、内部的には政治権力の腐敗という問題に直面した時代であったものの、資本主義が発達し、身分制が崩壊する過程の中で、チェッコリ絵は流行することができた。さらに、チェッコリ絵を起源と形式によって分類し、チェッコリ絵における現代的評価を論じた。知識が権力であった朝鮮時代の書物は大衆媒体にはなることができなかったが、代わりに彼らの念願である本が描かれたチェッコリ絵は流行し、大衆文化的な性格があることが分かった。

第 4 章では、チェッコリ絵が持つ内的意味を把握するために、朝鮮時代から現代までのチェッコリ絵におけるモチーフとなる本と図書館について分析した。朝鮮時代の本は主に官僚になるための出世の目的があり、権力とともに知識を得ることができる媒体であり、朝鮮人にとって最も価値のある物であった。こうした特性により、朝鮮時代の本は知識と情報媒体という普遍的な機能の裏側には権力の独占という政治的な役割もあった。朝鮮時代、本は権力の独占の空間である図書館とい

う空間を作り、独裁時代には独裁に対抗し、民主化を願う人々の空間である図書館を作り上げた。そして、現代では本を中心に文化空間を作り、個人的には家庭で自分のアイデンティティと個人の自己実現のための書斎という空間を作り上げた。つまり、人が本を書いて所有するが、朝鮮時代から本は空間を作り、その空間を支配する力があることを確認することができた。

第5章では、外的表現手法を明らかにするために、宮廷チェッコリ絵と民画チェッコリ絵の比較を通じて造形性を分析した。サイズ、モチーフ、構図と遠近法、書物の表現と装飾的表現に分類し、社会文化的な観点で比較アプローチした。特に大きな違いを示す遠近法表現と空間構成は生活の中で起因したという三つの主張を提示した。宮廷チェッコリ絵が絵画の観点から正統性を持つなら、民画チェッコリ絵は大衆文化の観点からみると大衆的伝統性があった。また、生活空間の違いが絵における空間表現に与えた影響を知ることができた。

第6章は理論的考察と並行しながら制作した作品を含み、本の歴史性を踏まえてグラフィック作品を制作した。本は空間を作るということに着目し、本の物理的特性と読書習慣や保管習慣によって変化する本をコンセプトにした。作品に反映されたチェッコリ絵の造形要素については正面性を中心とし、生活で見られる本のイメージを表現した。こうした作品制作を通じてチェッコリ絵の本箱を描かず、現代の本の形を活用したことで、表現できる範囲が広がり、継承の方向性が広がることが分かった。さらに、素朴なグラフィック表現による書物の表現は、日常で接する現代人の生活の中の一部を含んでおり、本が作る空間と視覚環境の中で、所有者のアイデンティティが現れることを確認した。

以上のように、本研究では、チェッコリ絵の現代性は本が作る空間にあり、その造形性は生活の中で起因したことを明らかにした。主に題材の借用だけを通じて制作されているチェッコリ絵の継承に関する研究の中で、社会文化的アプローチに基づいて造形を分析し、題材である本の歴史性を現代的に解釈したことと、そこに基づいたチェッコリ絵の新しい継承の方向性を現代の本を用いて提示したことが本研究の意義である。